

郷土館発

南吉の足跡

「南吉が歩いた奥三河」というテーマで、半田市にある新美南吉記念館で企画展が開催されています。平成二十五年、郷土館で公開した南吉に関する展示資料をそこに提供しています。

南吉は安城高等女学校教諭時代に鳳来寺山の麓で研修を受け、そこでいくつかの俳句を詠んでいます。その後ででしょうか、田口線に乗り清崎から歩いて塩津温泉を訪れたようです。南吉はその体験を「山の中」という小説に生かしました。南吉は児童文学作者として有名ですが、この作品は、大人を対象とした小説です。残念ながらこの作品は未完に終わり、書き上げられた



清崎駅(豊橋市鈴木萬年氏撮影)

*本文中「田口線」とあるが、当時は「田口鉄道」であった。

部分が全集の中に収められているのみです。

まだ電気が通らずにランプで旧田口線沿線を見ると、あちこちの河原や土手に合歓の花が咲いています。田口線の車両の内부는「病院の待合室」と表現されているように、白く塗られています。郷土館前の田口線車両を見ると実感できます。

清崎駅で降り、塩津までの道のりを、塩津から岡崎へ芸者見習いに出ている少女とともに歩きます。暗闇を二人で歩く太郎の心の動きも巧みに表現されています。

塩津温泉の描写は、今は建て替えられた「芳泉荘」に間違いないという描写がいくつも出てきます。

平成二十五年に「芳泉荘」のおばあさんにインタビューしまし



「病院の待合室」と表現された車内(郷土館展示車両)

た。嫁に来た頃の話を知ると、南吉の小説そのものという感じがします。南吉が訪ねてきたと思われる昭和十三年から五年後ぐらいにここへ嫁に来たようですから、記憶にある宿と共通する部分が多いのもうなずけます。作品の中に蛍が出てくる情景が描かれています。野々瀬川沿いには、今でも初夏になると蛍が飛び交います。平家蛍の小さな光を見て幼年期を過ごした南吉には、源氏蛍の輝きが驚きだったのかもしれない。

南吉が訪れた頃と変わってしまった情景も数多くありますが、合歓の木、蛍、塩津温泉、田口線車両等、当時をしのぶことのできるものはまだまだ残っています。田口線車両は清崎への移転とともに移動する予定です。南吉の目を通して描かれた車両や風景を忍んでいただけのものと期待しています。

尚、南吉と奥三河のつながりは、大海で発行されていた「博物館研究会」への投稿からです。しかし、この雑誌(研究会)については、全く資料が残っていません。もし、何等かの資料や記憶がありましたら、郷土館へ一報いただきますようお願いいたします。

(奥三河郷土館 平松 博久)